

## 『作庭記』の底流にあるアニミズム

### ―立石を中心に

#### 高宮さやか

#### 序章 研究の背景と目的、方法

##### 第1節 日本のアニミズムと我が国のニワ

飛鳥時代以降、大陸から伝わった蓬莱・神仙思想、仏教や禪などの外来の思想が日本庭園のなかに受容されてきたのは、もともとそれを可能にした素地があって、それは我が国の庭園が源流として持っていたアニミズムではないかとの仮説に立ち、その立証を試みるのが「日本庭園の底流にあるアニミズム」と題する一連の研究<sup>1</sup>の目的である。

「アニミズム」という語は19世紀にE. B. タイラー(1832-1917)が『原始文化』(1871)において提唱したもので、タイラーはこれをもって宗教の起源であるとした。ラテン語のAnima(靈魂)を語源とし、「精霊信仰」<sup>2</sup>等と訳されており、「あらゆる自然界の事物に靈魂が宿るという原始的な世界観」<sup>3</sup>と説明されている。この「アニミズム」は宗教学だけでなく現在では民俗学や文化人類学、心理学などの多分野で研究されている。

我が国はこのアニミズムの傾向の強い文化を有しているとも言われておりその特徴は、温暖湿潤な気候により自然界の恩恵が多く、自然を人間と対立するものではなく共生するものととらえ、あらゆるもの(土地、山、森、建物、道具等)に靈的なものを感じる感性が育ったことにある<sup>4</sup>。この「日本的アニミズム」といわれる研究には以下のようなものがある。

柳田國男、桜井徳太郎、宮田登、高取正男らはカミ観念、カミ信仰などを取り上げ民俗学的アプローチを行った<sup>5</sup>。

梅原猛は文明史的観点から日本の仏教や神道のベースに「自然と共生する視点に立つ日本的アニミズム」があるとする<sup>6</sup>。また『古事記』に描かれた日本の神話に見るように、我が国では自然界のいろいろなものに神が宿る、言い換えると靈が宿っており、このような世界観は後の神道につながっていると考えている。

岩田慶治はアニミズムとは古代の信仰ではなく、一人ひとりの直感を通しての神との出会いであって、そこに自然との共生が生まれてくると述べ<sup>7</sup>、岩田の

説はネオアニミズム論として知られる。

一方造園の分野では、重森三玲が磐座・神池を日本庭園の造形の源流とする見解を示しており、アニミズムとの関連を示唆するものとして注目される<sup>8</sup>。

中村一は日本庭園の成立過程について、「ニハ」は農耕開始以前古代社会にあつてはなわばりの意味をもつ生活圏そのものであり、農耕が始り共同体がより高度に組織化されるようになるとその範囲は縮まっていき、家を包み込む形をとるようになるが、その中には宗教的機能をもつ斎庭【ユニハ】や沙庭【サニハ】もあつたと考え、さらに飛鳥時代になると大陸の庭園文化が伝わり「ニハ」を理想化した「シマ」がつくられるようになった<sup>9</sup>と述べ、「シマ」は現在の庭園とほぼ同義にとらえている。これは万葉集などにその用例をみることができる。

##### 第2節 水辺の祭祀遺構の発掘と研究成果

昭和の後半から平成にかけて、日本各地で遺跡の発掘が行われ、古墳時代から縄文時代にまでさかのぼる祭祀場の遺構が相次いで検出された。

平成3年(1991)に発掘調査が始まった三重県の城之越遺跡(図1)は、古墳時代(4世紀～5世紀)のもので、3か所の湧水点から引いた流れには州浜がつくられ、要所に立石が立つ。また流れに挟まれた広場や祭壇とみられる平坦面があり、出土品は流れの底から検出される小型丸底壺や高杯、剣型や刀型の武器型木製品などの祭祀遺物であり、祭祀は5世紀まで執行されていたとされる<sup>10</sup>。

これとよく似た湧水点から流れをひく遺構や井戸と水溝の組み合わせの遺構、また自然河川を利用してつくられた遺構から祭祀遺物が検出される例があり<sup>11</sup>、梅本綾は出土品と文献との照合からいくつかの祭祀の様子を推定している。水中に投げ込んだ瓢箪の浮沈で事の真偽を確かめる「誓約(うけひ)」の儀礼や水辺で琴を弾き水神を呼びだす「琴(みこと)」の儀礼、鳥形舟・舟形木製品を投じて死者の魂を他界に送る葬送の儀礼、水辺で水神とともに数人が食事をする「共食(あひたげ)」の儀礼などである<sup>12</sup>。

これら祭祀のために造形された場合は、後の時代の庭園の造形によく似ていることから「ニワ状遺構」と呼ばれ、その意匠や技術は奈良時代へと続く造園意匠と技術の源流と見られるようになった。ニワ状遺構の評価をめぐる研究は、考古学と造園学の両分野にまたがっており、考古学分野では穂積裕昌<sup>13</sup>、網伸也<sup>14</sup>らの研究、奈良文化財研究所が主催した古代庭園研究<sup>15</sup>、造園分野では小野健吉<sup>16</sup>、本中眞<sup>17</sup>、

牛川喜幸<sup>18</sup>らによる研究がある。また祭祀を含むことから文献史や民俗学の見地から、榎村寛之<sup>19</sup>、梅本綾<sup>20</sup>らの研究もあわせて考察した。

### 第3節 水辺の祭祀遺構の構成要素

縄文時代後期半ばから飛鳥時代にかけて造形が行われた水辺の祭祀空間の主な構成要素は、湧水点からひく「流れ」または「溝」、その水流の護岸としての「州浜」または「石敷」、そして要所の「立石や石組み」である（表1、高宮 2020）。

「流れ」は弥生時代や飛鳥時代には石で溝状に整形された遺構として検出された例もある。湧水点は井戸であることもある。

「州浜」は祭祀の場そのものであり、ここで聖水を汲み、禊や祓い、ときには呪いをかけることが行われた。流れに手が届くよう、または歩いて入水できるようにするために浅く緩い勾配でつくられている。水に降りる石段を設けた遺構もある。このような形で「流れ」と「州浜」は聖なる親水空間を形成していたと言える。

ニワ状遺構で水際に臨んで立てられているのが石である。縄文時代の矢瀬遺跡には立石列や配石が検出された。弥生時代の池上曾根遺跡、下市瀬遺跡、六大A遺跡、藤江別所遺跡、纏向遺跡では検出されていない。古墳時代に入った屋代遺跡、城之越遺跡、阪原・阪戸遺跡では再び検出されるようになり、飛鳥時代には人工的な意匠と加工された石造品が現れ、奈良時代の庭園遺構である平城宮東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡庭園には再び自然石の石組みや立石が検出されており、その意匠は平安時代以降の毛越寺庭園等につながっていると考えられる<sup>21</sup>。

これらの石による造形のうち、湧水点の背後に屏風状に立てられた石や水に降りる階段になっている石については機能的側面の利用と考えられる。しかし流れに臨んで屹立する石、あるいは岸边に一群となって据えられた石組などには機能性以外の何らかの意味があったと考えられるがその目的や具体的なことは不明である。前述の重森の説のように、「磐座」や「磐境」として石そのものを祀ることは、保久良神社をはじめとする上古の神社において行われており<sup>22</sup>、天白磐座遺跡（古墳時代）のような山頂の大岩の下で祭祀が行われていた遺構もあることから、本論では同じ祭祀空間であるニワ状遺構の意匠を受け継いだ日本庭園の立石に着目し、平安時代後期（11世紀後半）に成立した『作庭記』を読むことによってアニミズムとの関係を検証する。

## 第1章 『作庭記』の作者と年代、その流布

『作庭記』は平安時代に成立したと見られている日本最古、ひいては世界最古の作庭書である。成立年代や著者については、外山英策の室町時代の偽作説<sup>23</sup>や木村三郎の鎌倉初期成立説<sup>24</sup>があるものの、現在は平安時代後期に修理太夫という役職にあった橘俊綱（1028—1094）が編纂したものという説が有力となっている。

『作庭記』は成立以来、秘伝、秘書とされ、大量に流布した書物ではないが、江戸時代に塙保己一が編纂した『群書類従』によって存在が知られており、明治になって活字版が出た。『作庭記』という書名は塙保己一が付けたもので、それ以前の写本では『前栽秘抄』『造庭之書』『庭作秘伝書』『後京極殿作庭記』等、または無題である<sup>25</sup>。

飛田範夫によると写本は谷村家のほか国会図書館、宮内庁書陵部、京都大学等 12 箇所に所蔵されており<sup>26</sup>、このうち谷村家本は幕末まで前田家にあったもので、明治以降行方がわからなくなっていたものが発見され、昭和 11 年(1936)に国宝の指定を受け、同 13 年(1938)に貴重図書出版会から複製本が出されたことから多くの研究者の目に触れるようになり研究が活発になった。

その内容は作庭の際の心得に始まり、当時の建築様式である寝殿造りに対応した庭園の地割、池の作り方、遣水の通し方、中島、州浜、泉水、瀧石組、植栽、立石等の指南書であり、極めて実践的な記述の一方で陰陽五行説や言い伝え、迷信の類までが援用されている。とくに石を立てることに関する記述が瀧石組を含めて半分近くに及ぶ（谷川家本的全 793 行中 332 行<sup>27</sup>）。また本書では庭をつくることを「石を立てんこと」と表記しており、作庭において石立てが最重要であるとの当時の認識が窺える。

## 第2章 「霊石」と「三尊仏の石」および禁忌

『作庭記』中にあらわれるアニミズムに関わると思われる石に関する名称は「霊石」と「三尊仏の石」の二つである。

「霊石」という名称は3か所にみられる。

「一もと立たる石をふせ、もと伏せたる石をたつる也。かくのときしつればその石かならず霊石となりてたたりをなすべし」<sup>28</sup>

「一高さ四五尺になりぬる石を丑寅方に立つへからず、或は霊石となり、魔縁入来のたよりとなるゆえに（後略）」<sup>29</sup>

「一霊石は自高峯丸はし下せとも落立る所に不違本座席也、（後略）」<sup>30</sup>

この「靈石」は通常は障りない石が作庭において据え方を誤ったり、方角が不適切である場合に「崇る石」になるものと説かれている。同様に崇りをなす石を「石神」と記述した箇所が1か所あり、諸国にその例があるとする<sup>31</sup>。「山若河辺に本ある石も其姿をえつれば必石神となりて成崇事国々おほし、(後略)」<sup>32</sup>

「三尊仏の石」という名称も3か所使われている。初出は「三尊仏の石はたち、品文字の石はふす常事也。」<sup>33</sup>というくだりで造形について述べている。

興味深いのは前述の「靈石」の崇りを封じるために「三尊仏の石」を据える方法が記されていることで、残る2カ所はこれにあたる。本書には多くの禁忌が記されており、「石をたつるにはおほくの禁忌あり、ひとつもこれを犯つればあるし常に病ありて、つひに命をうしなひ、所の荒廢して必鬼神のすみかとなるへしといへり。」<sup>34</sup>とある。28条の禁忌のうちの18条が石に関わるものである。この中にその方法が記されており、「高さ四尺五尺になりぬる石を丑寅方に立へからず、或は靈石となり、或魔縁入來のたよりとなるゆへに、その所に人の住することひさしからず、但、未申方に三尊仏のいしをたてむかへつればたたりをなさず、魔縁いりきたらさるへし。」<sup>35</sup>というものである。

また、「ふるきところをのつからたたりなす石なんとあればその石を尅するするいろの石をたてまわしへつればたたりをなす事なしといへり、又、三尊仏の立石をはとをくたてむかふへしといへり」<sup>36</sup>という方法もある。

このように『作庭記』に現れる「靈石」のイメージは崇るものである。それを避けるために多くの禁忌や回避の方法を伴っていることは当時の人々が石に対して「畏れ」の感情を持っていたことの表れと考えられる。

### 第3章 「こはんにしたがひて」の解釈

『作庭記』には、第2章の石の名称の他に、アニメズムに関わると思われる「こはん(こはむ、乞)」という語が以下のように6回現れる。

- ①その石のこはんをかきりとすへし
  - ②その石のこはんにしたかひて浪うちの石を
  - ③その石のこはんにしたかひてたてくたすへし
  - ④その石のこはむほどを多も少もたつへき也
  - ⑤その石のこはんにしたかひて立へき也
  - ⑥奥石をはその石の乞にしたかひてたつるなり
- (①～⑥<sup>37</sup>)

この語の解釈の経緯を振り返ってみると現在は概

ね「基盤説」「乞はん説」「小半説」の三つに分類できる。

最初に登場する「基盤説」は基盤の目にしたがって配石するというもので、龍居松之助<sup>38</sup>、江山正美<sup>39</sup>がこの説をとっている。これは江戸時代までの写本には濁点が記載されず、そのことは江戸時代の『群書類従』も同様であるが、明治になって活字になった際には濁点が振られて「ごばん」とされ<sup>40</sup>、このことに影響をうけたものと考えられる。活字化されたときに「ごばん」となった理由は不明であるが、龍居松之助が「ごばん」としている理由について田中正大は『嵯峨流庭古法秘伝之書』(室町時代)に基盤の目の中に描かれた庭の図があり、こういったものが助けとなって基盤としたのではないかと推測している<sup>41</sup>。田中の推測を裏付けるように龍居はこの基盤の目の図を自身が編集した『日本造庭法秘伝』<sup>42</sup>の中の「嵯峨流庭古法秘伝之書」に納めている。

解釈に大きな転機が訪れるのは昭和11年(1936)に谷村家本が国宝の指定を受け、同13年(1938)に複製本が出たことによる。昭和13年に谷村家蔵本の複製本が出て以降は森蘊をはじめとする「乞はん説」が主流となっていく。

この説は石が「乞う(請う)」と解釈するもので、大きく二つの論調に集約できる。一つは森蘊<sup>43</sup>、田村剛<sup>44</sup>、田中正大<sup>45</sup>、武居二郎<sup>46</sup>による「石の心」「石の気持ち」という語を用いて石から汲み取る造形的なバランスのとり方を表現しているとするものである。また近藤公夫<sup>47</sup>は仏教学者の言葉を借りて「石心」という語で比較的人格に近い表現をしており、英語訳<sup>48</sup>でも石を主語とする動詞に訳している。

もう一つは作庭者側の態度や能力に帰すもので斉藤勝雄<sup>49</sup>、オギュスタン・ベルク<sup>50</sup>、山本学治<sup>51</sup>、水尾比呂志<sup>52</sup>、久恒秀治<sup>53</sup>、木村三郎<sup>54</sup>、飛田範夫<sup>55</sup>、尼崎博正<sup>56</sup>がこの説をとる。このうち作庭の現場に立てばわかるとするのが田村剛、尼崎博正、飛田範夫である。また国語学者の萩原義雄<sup>57</sup>は人的請うではなく自然の請うであるとする。いずれも石を擬人化した表現で技術論を説いていると見ている。

これらとは異なる視点からの解釈として「小半説」がある。「小半説」は石の大きさを考慮した石組みの技法とみるもので、3か所目の前行に「よき石の半はかりひきおとりたるをよせたてて」とあることから①～⑤を石の大きさの説明とする説である。

針ヶ谷鐘吉<sup>58</sup>は「『作庭記』中の「こはん」の意義について」において①～⑤を「小半」、⑥を「色」とする。また上原敬二は『解説 山水並に野形図・作庭記』<sup>59</sup>において①～③小半 ④拒む ⑤小半

⑥乞/気としている。なかでも（擬人化は）釈然としないので小半説をとると言いながら、④については「拒む」としており石が拒むのなら擬人化表現と言える。また「乞」は「気」ではないかと考え、石から立ち上る強い靈気を想定していることは注目される。

以上、「石が乞う」ことについて「石の心」「石の気持ち」などの丁寧な解釈も含めて「擬人化」が根底にあると言えよう。

## 結章

『作庭記』には「石のこはんにしたかひて」の他にも「（左右のわき石の）おもひあふ事なくは無益なり」<sup>60</sup>という表現、「にくる石（逃げる石）をふ石（追う石）」<sup>61</sup>、あるいは山を帝王、水を臣下、石を補佐の臣に例えるくだり<sup>62</sup>や「たとへは童部のとてうく（くり返し記号）ひひくめといふたはふれをしたるかことし。」<sup>63</sup>と子供たちの遊んでいる情景に例えるといった擬人化表現がある。

心理学の分野では J.ピアジェ（1896-1980）が子どもの心理の発達段階でみられる自然観を「擬人観」とした。ピアジェはこの「擬人観」をアニミズムと呼び<sup>64</sup>、この学説は現在でも心理学の分野で検証されながら引用されている<sup>65</sup>。

『作庭記』には他に「野筋の石はむら犬のふせるかことし、豕むらのはしりちれるかことし、小牛の母にたはふれたるかことし。」<sup>66</sup>のように石をムク犬や牛の親子に例える箇所があり、無機物である石にまるで命があるような躍動感が感ぜられる。動物の擬人化表現もまた当時すでに我が国に伝わっていた『大唐西域記』（7世紀成立）の仏教説話「兎王本生譚」は狐と猿と兎が善行を積むうちに、兎が自分の身を火になげうって瘦せた老人（帝釈天の化身）に供する話であり、平安時代末期成立の『今昔物語』（12世紀前半頃）にも動物の擬人化表現が見られる。絵画では『鳥獣人物戯画』（1157～1179年頃）がよく知られている。

辻惟雄は日本美術全般の特色として「かざり」「遊び」「日本のアニミズム」があり、縄文土器の蛇（水を司る神）、聖なる樹木に化現する「立木仏」、「御伽草子」のつくも神（器物の精霊）や「百鬼夜行図」を挙げるとともに近世のアニミストとして伊藤若冲、葛飾北斎、現代の棟方志功を挙げている<sup>67</sup>。また『鳥獣人物戯画』については直接アニミズムとの関連を述べてはいないが、評論集『あそびとアニミズムの美術』<sup>68</sup>の一つに「鳥獣戯画とをこ絵」を納めている。このように辻も「擬人化」とアニミズムは深い

関係にあると見ていることがわかる。

したがって『作庭記』の「石のこはんにしたかひて」という擬人化表現には平安時代の作庭においてニワ状遺構の立石の意匠を継承するとともに、「靈石」「三尊仏の石」とあわせてその根底にアニミズム的な要素を内包していると言えよう。

<sup>1</sup> 高宮さやか「日本庭園の底流にあるアニミズム」（京都造形芸術大学修士論文）、2020年、「古代庭園にみる島と州浜」『京都芸術大学大学院紀要』（1）、京都芸術大学、2021年。

<sup>2</sup> 旺文社『英和中辞典』、1975年、Animismの項。

<sup>3</sup> 旺文社前掲書（2）同項。

<sup>4</sup> 長谷部八朗「アニミズムとアニマティズムのあいだ」『日本文化研究』第八号 特集「日本的アニミズムの現代」、駒沢女子大学日本文化研究所、2009年。

<sup>5</sup> 佐々木俊道「『日本的アニミズムの現代』について」駒沢女子大学日本文化研究所前掲書（4）、他。

<sup>6</sup> 梅原猛「アニミズム再考」『国際日本文化研究センター紀要』『日本研究』（1）、国際日本文化研究センター、1989年。

<sup>7</sup> 岩田慶治『草木虫魚の人類学』講談社、1991年。

<sup>8</sup> 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系第31巻 上古・日本庭園源流（二）』、社会思想社、1975年、序文。

<sup>9</sup> 中村一、尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2001年、pp. 9-23。

<sup>10</sup> 穂積裕昌「城之越遺跡」『シンポジウム1 水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会、1996年、pp. 42-49。

<sup>11</sup> 日本考古学協会前掲書（12）。

<sup>12</sup> 梅本綾「水辺の祭祀の諸相とその意義」『古事：天理大学考古学研究室紀要』（3）、天理大学考古学研究室、2009年、pp. 10-28。

<sup>13</sup> 穂積裕昌「古墳時代祭儀空間の成立—古墳時代の庭状遺構の評価をめぐる—」『研究紀要』第15-1号、三重県埋蔵文化財センター、2006年。

<sup>14</sup> 網伸也「日本庭園の萌芽をみる—考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷—」近畿大学民俗学研究所『民俗文化』No. 31、2019年。

<sup>15</sup> 『奈良文化財研究所学報第74冊 古代庭園の研究 I—古墳時代以前～奈良時代』、奈良文化財研究所、2006年。

<sup>16</sup> 小野健吉『日本庭園の歴史と文化』、吉川弘文館、2017年他。

<sup>17</sup> 本中眞「飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構」『ランドスケープ研究』61（3）日本造園学会、1998年。

<sup>18</sup> 牛川喜幸「古代庭園の研究—水をめぐる造形とその系譜—」博士論文、1993年。

<sup>19</sup> 榎村寛之「斎宮と水の祭祀」日本考古学協会前掲書（10）、pp. 203-213。

- <sup>20</sup> 梅本前掲論文 (12)。
- <sup>21</sup> 高宮前掲論文 (1)
- <sup>22</sup> 重森前掲書 (8)。
- <sup>23</sup> 外山英策『室町時代庭園史』、思文閣、1934 年、p. 6。
- <sup>24</sup> 木村三郎「『作庭記』研究の構図」『造園雑誌』56 (5)、日本造園学会、1993 年、pp. 1-6。
- <sup>25</sup> 飛田範夫「造園古書の系譜」『造園雑誌』47 (5)、(社) 日本造園学会、1938 年、pp. 49-54。
- <sup>26</sup> 飛田前掲論文 (25)。
- <sup>27</sup> 萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011 年、pp. 2-52、谷村家本の翻刻を筆者が計測。
- <sup>28</sup> 上原敬二『解説山水並びに野形図・作庭記』加島書店、1982 年、p. 63。
- <sup>29</sup> 上原前掲書 (28)、p. 63。
- <sup>30</sup> 上原前掲書 (28)、p. 65。
- <sup>31</sup> 上原前掲書 (28)、p. 65。
- <sup>32</sup> 上原前掲書 (28)、p. 65。
- <sup>33</sup> 上原前掲書 (28)、p. 63。
- <sup>34</sup> 上原前掲書 (28)、p. 63。
- <sup>35</sup> 上原前掲書 (28)、p. 63。下線筆者。
- <sup>36</sup> 上原前掲書 (28)、p. 66。下線筆者。
- <sup>37</sup> 萩原前掲書 (27)。
- <sup>38</sup> 龍居松之助『造園叢書第廿三卷 日本造庭法秘傳』雄山閣、1931 年。本書は昭和 13 年 (1938) の谷川家蔵本の写真複製版が出る前に出版されたもので、龍居はこの中に『作庭記』を掲載して「ごばん」としている。
- <sup>39</sup> 江山正美「作庭記の形態學的研究」『造園研究』日本造園学会、1940 年、p. 83。「従って作庭記の説く石組みの根本手法は、先角のある主石を立てて次の石を其の石と格子目や碁盤目になるやうに組み合わせよと云ふのである。」
- <sup>40</sup> 『群書類従・第十九輯』、続群書類従完成会、1932 年。
- <sup>41</sup> 田中正大『SD 選書 23 日本の庭園』、鹿島出版会、1967 年、pp. 55-56。
- <sup>42</sup> 龍居前掲書 (38)、p. 51。
- <sup>43</sup> 森蘊『平安時代庭園の研究』、桑名文星堂、1940 年。註記 (p. 159) にて「従来「こはむ」を「ごばん」(碁盤)と解釈して居たが「その石のこはむにしたかひて」は「その石の乞」即ちその石の要求によつての意味であり、後に揚ぐる「えうじ」を「こうし」(格子)として共に平安時代に於ける石組に幾何学的な配置を主張する説の成立せざる事を附記して置かう。」
- <sup>43-2</sup> 森蘊『NHK ブックス「作庭記」の世界』、日本放送出版協会、1986 年。  
「依頼者の好みよりも、もっと石の心即ち、石のバランスの方を優先させるということに他ならないであろう。」p. 122。①要求する ②随つて

- ③希望に随つて ④要望する ⑤求める気持ち ⑥調和する
- <sup>44</sup> 田村剛『作庭記』、相模書房、1964 年、p. 205-206。  
「私は本書を通読して、それが後に出て来るただ一箇所漢字にあてられている「乞に従いて」の乞はんであるとしたい。石を心あるものと見て、その石が要請するといった心持である。今日でも石を遣う場合に、そうした石の気持ちになって、石を配ることのあるのは、實際家の体験するところである。又本書にも立石口伝の条には、石を擬人したり、動物に擬えて、立てることを教えている所がある。すべて同じ心持である。即ちここでは主石が要請するだけのものを据える。余計にすることを戒めたものである。乞はんは、石がほしいだろうと、石の心を推しはかった用い方である。」
- <sup>45</sup> 田中正大『SD 選書 23 日本の庭園』、鹿島出版会、1967 年、pp. 55-63。「私は、この言葉の中に、作庭記の全内容が凝集されていると考えている。(中略) 主石の要求に従つて立てるという意味である。  
(中略) 作庭家が「自然石」の要求に従うためには、自然石とへだてない親しみをもっていることが必要であろう。(中略) 自然石と作庭家の間に中間項が入るのではなくて、直接に、自然石と触れるというのが「乞はんに従う」の真意であろう。」田中はこの項で作庭家と石の関係を母親と赤ちゃんに例え、その間に「愛情」がある、また石は無生物であるが作庭家とは「有機的關係」を結ぶもの、としている。
- <sup>46</sup> 武居二郎『作庭記 現代語訳と解説』、京都芸術短期大学ランドスケープデザイン研究室武居二郎教授定年講義実行委員会、1995 年。  
①気持ちを汲み取りながら ②意見に従つて ③雰囲気に合わせて ④気持ちを汲み取ったうえで ⑤気持ちを汲み取りながら ⑥気持ちを汲みながら  
武居は「この言葉の解釈は実に様々であるが、作庭記の編者の思想を表現しているとも思える言葉である。(中略) その石が希望している気持ちを汲み取つてと訳するのが適當である。」と述べる。
- <sup>47</sup> 近藤公夫「作庭記の「こはんにしたかひて」に関する一考察」『造園雑誌』34 (3)、日本造園学会、1971 年、pp. 44-41。「石がこふであろう所にしたがつて」と直訳され、石を人に擬してその意志による「こふ」(主張)の存在が示唆される。(中略)「こはん」は用例として dynamic な sense をもつ文法上の動名詞に類するものであり、文意の上で石心に関する内容の語句と結論された。」近藤はこの小論で仏教学者の言を引き「石心」という語を用いている。
- <sup>48</sup> 近藤公夫「"SAKU-TEI-KI" in English」『造園

雑誌』39(3)、日本造園学会、1976年。

①depend ②depend ③accord ④require  
⑤accord ⑥request (英訳掲載のみ)

<sup>49</sup> 齊藤勝雄『齊藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』、河出書房新社、1976年、p. 56。

「実際の石組み技法では、そのように先きに据えた石に対して大小高低の調子を合わせるように、恰も先きに据えた石と相談をしながら仕事を進めるように、次々の石を組んで行くのであるから、<乞はん>は誠にぴったりと呼吸のあった表現である。著者も上記のとおり<乞はん>組だが、これほどまでに石を擬人的に徹して扱った表現例は、作庭記の本文中、他に見られないところに、少々先入観的、希望的な解釈であるような気持が、わが心の片隅にしこりとなっているようで仕方がない。(中略)石が人間に向かって希望を述べるといような無理な解釈をしなくても(後略)」

<sup>50</sup> オギュスタン・ベルク『風土の日本—自然と文化の通態』、筑摩書房、1975年、pp. 222-223

<sup>51</sup> 山本学治『森のめぐみ—木と日本人』、筑摩書房、1975年、pp. 137-138。「次の石がこう置いてほしいという「乞わんにしたがって」置く、というのだ。(原文改行)もちろん、地形や石がものをいうわけではない。その地形、その石の形がもっている可能性を読み取るだけの才能と見識が必要だということだ。(中略)自然の山や川や海の美しさを、「乞わんにしたがう」という自然な手法で表現する庭づくりが、ひとつのデザイン、芸術として育っていったのだ。」

<sup>52</sup> 水尾比呂志「石組と石庭」相賀徹夫編『探訪日本の庭7 京都(三) 洛西』、小学館、1978年、p. 30。「(森蘊、田中正大の説を用いて)古代の庭で早くも石は、単なる素材ではなく、その形状や性状についての観照批評の意識をも喚起する役割を果たしていたことを、私たちは知らされるのである。」

<sup>53</sup> 久恒秀治『作庭記秘抄』、誠文堂新光社、1979年、p. 31。「乞はんに従ひて。要求に従って。据え終わった廉ある主石がその極まった姿、形からその次々の石を欲しくなる、その要求。」

<sup>54</sup> 木村三郎「『作庭記』新考」『造園雑誌』47(4)、日本造園学会、1984年、p. 242。「「石」といった自然物を擬人化させて使っている。甚だ飛躍した感じを与えていることは確かである。(中略)禅門の解義が前提となって初めて自然物にこのような擬人的な石の乞はんに従ふ表現が生かされて使い得ることはあり得ることと言える。」

<sup>55</sup> 飛田範夫『SD選書193「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985年、p. 162。「立てた石が望んでいるように、立てていくべきだという意味である。「石のこはんにしたがふ」ということは、一度でも石を据えた経験のある人には実感として理解できるであろう。現代的に言えば、バランスよ

く石を並べていくということ、即ち先に置いた石をよく見ながら、周囲との均衡を保つように次の石を並べていくということである。」さらに飛田は「この言葉にはさらに深い意味がある」として現場における作庭者の臨機応変な対応を「こはんにしたがふ」ことであるとしている。

<sup>56</sup> 中村一・尼崎博正『風景をつくる—現代の造園と伝統的日本庭園』、昭和堂、2001年、p. 219。「「こはん(乞わん)」という言葉が石の気持ちの表現としてもちいられている。(中略)作庭の現場では実際に石が語りかけてくるものなのである。その石の言葉に耳を傾けなくて、巧く配置しようと必死になって頭をめぐらせるだけでは石は据わらない。(中略)「こはんにしたかう」の意味は一つ一つの素材の持ち味を五感で受けとめることによってはじめて理解できるのである。」

<sup>57</sup> 萩原前掲書(27)。

<sup>58</sup> 針ヶ谷鐘吉「『作庭記』中の「こはん」の意義について」、日本造園学会、1966年、p. 7。

<sup>59</sup> 上原前掲書(28)。上原は「乞の説に釈然としないものがある。さればとて特に研究したわけではないが、気持ちの上で腑に落ちない。そこで針ヶ谷氏の小半説をとるのだがその出典らしいものを示しておいた。もちろん漢字で示してある乞まで小半と主張するわけではなく、これは乞でもよいであろう、そこに仮名書きと漢字書きの差を認める、ただし根拠は弱い乞に近い文字を一例として示しておいた。」(⑥について)「もしかすると乞の字形は気ではないかと臆断するのである。石に霊あるものとしてその立ちあがりの形を奥石という点にも関係づけで述べたのではあるまいか、憶測ではあるが小半を主張する立前でこの説をとる。」と述べている。

<sup>60</sup> 上原前掲書(28)、p. 56。

<sup>61</sup> 上原前掲書(28)、p. 63。

<sup>62</sup> 上原前掲書(28)、p. 60。

<sup>63</sup> 上原前掲書(28)、p. 63。

<sup>64</sup> 『世界大百科事典』平凡社、1965年、「擬人観」の項。J. ピアジェ著、中垣啓訳『ピアジェに学ぶ認知発達の科学』、北大路書房、2007年、pp. 123-125。

<sup>65</sup> 蘭香代子「童話に表現されるアニミズムの心理」、門前豊志子「子どもとアニミズム」駒沢大学日本文化研究所前掲書(4)所収。

<sup>66</sup> 上原前掲書(28)、p. 62。

<sup>67</sup> 辻惟雄「日本美術に流れるアニミズム」『辻惟雄集2「あそび」とアニミズムの美術』、岩波書店、2013年。

<sup>68</sup> 辻前掲書(67)。

(図版)



図1 城之越遺跡（三重県 古墳時代）  
平成30年7月筆者撮影



表1 ニワ状遺構、庭園遺構 構成要素一覽

[illegible]



## Animism of the Japanese garden in “Sakutei-ki”

### —Centering around stone arranging

Sayaka TAKAMIYA

Animism is the way in which ancient people viewed the natural environment which recognize the spiritual beings in natural objects. The Japanese garden embraced foreign thought like Buddhism, Zen, Shinsen, etc., indicating that was accepting of religious thought. I have examined the role of Animism in the art of the Japanese garden. The purpose of this article is to highlight how animistic beliefs underlie the Japanese garden, especially in the concept of “stone arranging”.

In my previous article, I covered sought the original concept of Japanese garden. I explained that the Japanese garden is a landscaped space for ancient divine service which originally had a spiritual character and quality.

There are three prime items in a space devoted to ancient divine service, “stream” “suhama” and “stone arranging”. Ancient divine service was carried out near a “stream” or seashore for drawing saintly water and throwing goods into the water. The “suhama” is pebble beach which was a stage for divine service. The third item, “stone arranging” refers to the traditional practice of building structures in the garden with stones. The arranged stones often have the name of Buddha or Shinto on them. The practice had been started in the Jomon period (B.C.14-B.C.4c) and has continued in modern landscape architecture. Also, the practice of stone arranging had many taboos and folklore associated with it. I have picked up the book “Sakutei-ki” to understand the Animistic somethings. “Sakutei-ki” is a book written in Heian period(11c) by Tachibana no Toshituna, in which we can see many notes on stone arranging especially about standing stone.

In “Sakutei-ki”, we can see two naming of stone arranging. One is “Sanzonbutu”(three noble Buddhas), and the other is “Reiseki”(curseing stone).

“Sakutei-ki” notes 18 taboos associated with stone arranging. If a gardener violates these taboos, the estate is cursed and ruined.

The sentence “ishi no kohan ni shitakahite”(read as “ishi no kowan ni shitagaite”) appears six times in “Sakutei-ki.” There are discrepancies in its interpretation. The most widely supported interpretation is that “kohan ni shitakahite” means following the first stone’s request or requirement which implies the stone has a will. It is an expression of how the natural environment was viewed in the Heian period. I have collected interpretations of “kohan ni shitakahite” from 22 reserchers, of which 19 interpretations support following the stone’s request as personification.

And like this sense is the base of accepting a Buddhistic name or idea. Since a Japanese garden was a space for divine service, it can be inferred that it was accepting of a spiritual practice such as stone arranging.